

## はじめに

保護者と学校（先生）は、もつと良い関係を築くことができます。長く小学校の学級担任をしてきて、多くの保護者を見てきて感じていることです。保護者と学校の関係において、先生は様々な配慮をしています。保護者も少しの配慮をすることで、関係がうまくいくことが多くなります。

私は小学校の学級担任を22年間していました。その間、学級経営でトラブルが起こらないことにエネルギーを使っていました。外部から見ると大きな問題のない学級のように見えていたと思います。「子どもは失敗から学ぶ」という考え方もあります。それは正しいのですが、学級における予期しない色々なトラブルは先生の仕事を増やし、本来すべきことに手が回らなくなる可能性も高いです。大きなトラブルが起こら

ないように先手先手で対応しているクラスは割合落ち着いていることが多いです。

余裕のない教員は、何かトラブルが起こってからバタバタとすることに なります。子どもが何かのトラブルを起こすと、状況にもよりますが、すべきことが色々発生 します。そういった中で、後手後手となり、余裕がなくなつていきます。本来は最優 先されるべき授業の準備などもおろそかになり、結果としてさらに違うトラブルが発 生するということになりがちです。

新年度、保護者と先生の関係はリセットされ、プラスマイナスゼロから始まります。その後、良い関係性を保つていきたいものです。保護者と先生が互いを批判し合う状 況は、子どもにとってプラスにはなりません。子どもに問題があるほど、学校（先生） に問題があるほど、保護者と先生は協力していく必要があるのだと思います。先ほど 例に出した子どもがトラブルを起こしにくい学級経営ではないのですが、保護者が先 生と関わる際に、対立的に関わるのではなく、協力的に関わるためのコツがあります。 そういったものを保護者が意識するだけで、先生との関係が良好になる可能性が高ま

ります。

本書では、後半で「クレームのピラミッドモデル」を紹介しています。保護者が学校にクレームなどを伝える際、いきなりクレームを言うのではなく、質問、相談という段階があるというものです。それぞれの段階で適切に対応をすることができれば、クレームという形には至らないと考えられます。この際の「適切な対応」は、学校がすべきこともあります。保護者がすべきこともあります。保護者としては、状況に応じて、適切な方法で学校へ思いを伝えていくことが大切になります。

本書では、具体的な方法、考え方を記しています。書かれているものは、1つのモデルのようなものです。学校の状況（どんな先生かなど）、子どもの状況（性格、年齢など）、地域の状況などによって変わる部分があります。書かれているものを参考にしながら、目の前の状況に合わせた対応をしていくと良いと思います。

本書を読まれている多くの保護者が、学校（先生）とより良い関係を築けることを

願っています。そのことは、子どもにとっても、先生にとっても良いことです。保護者、先生、そして子どもが、素敵な日々を過ごすことができるよう心から願っています。

鈴木 邦明

# 第1章 保護者と学校の関係

## ●良好な関係が良い

- ① 良好な関係が良い……………2
- ② 人格形成への影響……………4
- ③ 4月の「担任ハズレ」は言わない……………9
- ④ 保護者の指摘で学校（先生）の質が向上する……………14

## ●車の両輪

- ⑤ 車の両輪……………18
- ⑥ 学校（先生）の変化……………20

## 第2章 コロナ禍以降の変化

7	家庭（保護者）の変化	23
8	社会の変化	25
9	学校の仕組み（役割）を知る	28
1	行事が減った	34
2	オンラインのプラス、マイナス	38
●	子どもの成長への影響（コロナ）	
3	コロナによる子どもの成長への影響	44
4	身体への影響	45
5	心への影響	47

## 第3章 学校の組織

- 1 学校の組織とは……………52
- 2 先生などの種類……………56
- 3 教育委員会、文部科学省との関係……………63
- 4 学校敷地内にある学童など……………66
- 5 学校、学級の種類……………69

## 第4章 伝え方の実際

### ●伝え方の基本

- 1 伝える方法……………74

- ② 伝えるタイミング…………… 84
- ③ 言葉遣い…………… 94
- ④ クレームのピラミッドモデル…………… 99
- ⑤ 質問（第1段階）「～ですか？」…………… 104
- ① 「子どもの文房具がなくなるのですが、落とし物箱などには入っていませんか？」…………… 105
- ② 「〇〇さんとトラブルがあるようです。私が相手の親と話をした方が良いですか？」…………… 106
- ③ 「通学路に危険な場所があるのですが、どこに連絡すれば良いですか？」…………… 107
- ④ 「学習についていくことができているようですが、先生からはどのように見えていますか？ 何か家庭でできることがあれば教えてください」…………… 108
- ⑤ 「通知表に書かれているものに関して、お聞きしたいことがありますか？」…………… 110
- ⑥ 「以前はよく家庭に持ち帰っていたタブレット／PCを最近は持ち帰ってこないのですが、何か変わりましたか？」…………… 111
- ⑦ 「給食が苦手なのですが、家庭でできることはありますか？」…………… 113

- ⑧ 「罰ゲームは不適切ではないですか？」……………114
- ⑨ 「連帯責任というやり方は不適切ではないですか？」……………115
- ⑩ 「子どもが学校に行きたがらないのですが、何か気づくことはありますか？」……………116
- ⑪ 「宿題が多過ぎ（少な過ぎ）ませんか？」……………117
- ⑫ 「毎年、夏休み明けには学校に行きたがらないのですが、家庭でできることはありますか？」……………119
- 6** 相談（第2段階）「～できませんか？」……………121
- ① 「持ち物に新聞紙と書いてあるのですが、何か代替りのもので代用できませんか？」……………123
- ② 「友達がものを借りて返ってこないことがあるようなのですが、確認をお願いできますか？」……………124
- ③ 「友達からのちよっかいがあり、勉強に集中できないようです。席を替えてもらうなどの対応は可能ですか？」……………125
- ④ 「懇談会などをオンラインで実施できませんか？」……………126

- ⑤ 「他の学校では毎日タブレット／PCを持ち帰っているそうなのですが、同じようにできませんか？」……………128
- ⑥ 「学校の欠席の連絡が連絡帳なのですが、アプリなどを使ったやり方に変えることはできませんか？」……………129
- ⑦ 「学校行事で自分の子ども以外の写真もネットにアップしている保護者がいるので、学校として対応できませんか？」……………130
- ⑧ 「学級閉鎖の連絡はもう少し早めにしてもらうことは可能ですか？」……………131
- ⑨ 「夏の時期に水筒の中身が水またはお茶のみではなく、体に良い飲み物も可能にできませんか？」……………132
- ⑩ 「配付物を紙ではなく、デジタルで配付できませんか？」……………134
- ⑪ 「学級閉鎖（休校）ではなく、オンライン授業にはできませんか？」……………135
- ⑫ 「新学年のクラス替えで〇〇さんと別のクラスにしてもらうことは可能ですか？」……………136
- ⑦ クレーム（第3段階）「～では困ります」……………137
- ① 「先生が怖くて学校へ行きたくないと言っています」……………140

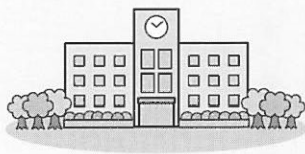
- ② 「感情的に叱る（怒る）のではなく、子どもがわかるように理由を説明するべきではないですか」…………… 141
- ③ 「トラブルのリスクもあるので、現金での集金はやめてほしい」…………… 142
- ④ 「学校のトイレはあまりに汚くないですか」…………… 144
- ⑤ 「いつまでも担任が不在なのは子どもたちの学ぶ権利の侵害では」…………… 145
- ⑥ 「家庭状況に配慮して活動に取り組んでほしい」…………… 146
- ⑦ 「無理矢理に全員参加するのは良くないのではないか」…………… 147
- ⑧ 「一部の人の意見だけで決めていけないほしい」…………… 149
- ⑨ 「子どもの文房具が頻繁に壊されています。相手の親に伝えてください」…………… 150
- ⑩ 「担任の先生を替えてほしい」…………… 151
- ⑪ 「周りに対してあまりに迷惑な子どもがいます。出席停止にしてください」…………… 152

第

1

章

# 保護者と学校の関係



## 良好な関係が良い

# 1

## 良好な関係が良い

学校（先生）と家庭（保護者）の関係は良好であることが望ましいです。先生と保護者の関係だけではありませんが、関係性が良い状況だからこそ、お互いに「尊重をしよう」、「より良くしていこう」という気持ちになります。学校に何かを伝えようと思っている保護者は、子どもや先生に関して何らかのことを思っています。例えば、自分の子どもが友達からイジワルをされている、学習で苦労している部分があるなどです。親の立場としては、誰か（担任、クラスメイトなど）を悪者にして、批判などをした気持ちにもなります。ただ、学級担任の関わりの不十分さなどを指摘し、叱責したとしても、状況は好転していかないことが多いです。

子どもが何らかのトラブルを抱えている状況では、そういった状況だからこそ、保

護者は先生と良好な関係であることが望ましいです。保護者と先生の関係が良好でない状況では、両者とも相手を批判、非難するような形になってしまうことも多いです。先生と保護者の関係だけではないですが、相手の悪い所を指摘し、文句のようなものを言っているだけでは状況は良い方向へは進んでいきません。難しい状況だからこそ、良好な関係の中でどういったことが子どもにとってプラスになるのか、子どもの問題を改善するには何をすることが良いのかなどを考えることができるようになります。

人間関係は急にできあがるものではありません。先ほども書いたように、何らかの問題（トラブル）が発生したときはどうしても他の人を悪く言いがちになります。それなので、人間関係の構築は普段から行っていくことが大事になります。4月に新しいクラスになり、新しい担任と関わるようになったら、まずは良好な人間関係を築くことを心がけると良いでしょう。学校（先生）と家庭（保護者）の関係が良好であれば、何かトラブルがあったとしても解決につながりやすくなります。また、良好な関係であれば、問題が小さな段階で対応ができることも多く、大きなトラブルにまで至ることなく解決できることが多いと思われます。

良好な関係が良い

## 2

### 人格形成への影響

子どもが日々過ごす環境はとても大事です。子どもは過ごす環境によって成長に違いが見られることは多くの人が承知していることだと思います。子どもが過ごす環境の中で大きなものは「学校」と「家庭」です。どちらにおいても、荒れた環境であれば、子どもの育ちに悪影響を及ぼすことが想像できます。例えば、学級崩壊とされるクラスにおいては、毎日様々なトラブルが生じます。たくさんの子どもがいじめやイタズラなどの被害者になってしまう可能性もあります。また、喧嘩、いじめなどの人間関係のトラブルが多数発生することにより、担任はそういったことへの対応で苦勞し、学習への準備なども十分にできない状況となります。先生に精神的な余裕がなくなり、一人一人の子どもへのケアなども難しくなり、授業の質も低くなりがちです。

「家庭」も同様です。両親が毎日のように喧嘩をしているような家庭の場合、それ

を見ている子どもにも悪影響もあるでしょう。もちろん、親が子どもを殴ったり、蹴ったりという身体的な虐待をしていれば、子どもの育ちに影響があるでしょう。

近年、子どもが過ごす環境に関する科学的な研究が進んでいます。MRIなどで脳の状態を把握できるようになったことも影響しています。例えば、親の不適切な関わりがどのように脳へ影響しているかに関する福井大学の友田先生の研究などが良い例です。その研究では、親の不適切な関わりが子どもの脳を部分的に萎縮させるということを発見しました。親から虐待などを受けた子どもは、そうでない子どもと比較において、コミュニケーションを司る部位である前頭前野、視覚に関わる視覚野などに萎縮が見られました。また、虐待の内容に関して、殴る、蹴るなどの身体的な虐待よりも、暴言などの虐待の方が脳の萎縮は大きかったという結果が出ています。以前から経験則として捉えられてきたものが、科学の進歩によって明らかにされてきた良い例でしょう。

少し違ったものでは、自宅が散らかっている子どもは、そういったものを当たり前

として育っていきます。学校の机の中も整理ができないということにつながりやすいです。私は小学校の学級担任だったので、教室での子ども机やロッカーの整頓の状況は把握しています。以前は家庭訪問があったので、担任は子どもの自宅の中の状況を見ることもできました。学校の子どもの机やロッカーの整頓の状態は、家庭の整頓状態と似ていることが多いということを感じていました。

そういった子どもの育ち環境において、「学校」と「家庭」の関係性は様々な形で影響を与えます。先生と保護者の関係が良好であれば、子どもはその姿を見て、人が協力していくことなどを身近なところで知ることとなります。問題は逆の場合です。先生と保護者の関係性が悪い状態は、子どもに良くない影響を与える可能性があります。家庭で、保護者が先生の悪口や不平などを言うことを子どもは聞くこととなります。学校において先生は「周りと協力すること」や「相手を尊重すること」などの大切さを子どもたちに伝えます。先生が発するそういった言葉に子どもは真実味を持ちにくくなり、また、人という存在の裏表のようなものを感じてしまいます。「相手を信頼する」や「他の人と上手に関わる」などのコミュニケーションにおける基本

的なことの獲得に悪い影響を与えてしまうことにつながります。先生と保護者の関係を良好なものにすることは、様々な形で子どもに影響を与えることです。子どもがどういった状態であれ、そのことは忘れないようにしたいです。

子どもの過ごす環境に関しては様々な研究がされています。一卵性双生児がその後、どのように成長していくのかなどに関するものは有名なものです。また、ノーベル経済学賞を受賞したアメリカのヘックマン博士の研究では、経済的に困窮している家庭で育っている子どもに年齢が小さいうちに良質な保育、教育を与えることで、その後の成長に大きく影響を与えているというものがありません。以前は、子どもの様々な育ちにおいて「遺伝的要素」が大きく影響をしているという考え方が一般的でした。現在は、「遺伝的要素」も関係しているけれども「環境的要素（育ちの環境）」も大きく影響しているというのが定説です。例えば、プロ野球選手の子どもで親と同じようにプロ野球選手になる人がいます。これは以前であれば、肉体的（遺伝的要素）にそういったものを受け継いでいたから、そのように育ったという考え方です。そういった面もあるのですが、それと同じ程度で育った環境が影響を与えているというのが現在

の考え方です。親がプロ野球選手であれば、一緒に運動をする機会も多くなるはずです。運動ができる施設なども周りにある環境です。親がトレーニングする姿を見ることなどもしているはずで、そういった「環境的要素」と生まれ持った「遺伝的要素」の両方によって、子どもがプロスポーツ選手になっていく確率が高まるのだということです。

もう少し正確に説明をすると、育ちの分野によって「遺伝的要素」と「環境的要素」の影響の度合いに違いがあります。行動遺伝学を研究している慶應義塾大学の安藤先生の研究では、「体格」に関しては遺伝的影響が大きく、身長の場合は80%、肥満に関しては70%と言われています。逆に「性格」については、遺伝的影響が小さいとされており30%、40%とされています。学力に関しては、遺伝的要素が60%、環境的要素が40%とされています。年齢が小さいほど、環境の影響があり、年齢が高くなるに従い遺伝的要素の影響が大きくなるとされています。

良好な関係が良い

### 3

## 4月の「担任ハズレ」は言わない

現在、多くの学校では学級担任は1年間で替わります。私が大学を卒業し、小学校の先生になった頃は複数年（2年間、3年間）同じクラスを担当することも一般的でした。それが1年ごとで担任が替わる形に変わってきています。

そういったこともあり、毎年4月には新しい学級担任の発表があります。その時に保護者が注意すべきことが「担任ハズレ」などの発言をしないということです。現代はSNSなどにより、学校（先生）に関する様々な情報を保護者が入手することができます。昔でも、井戸端会議のようなものの中でそういったものが行われていました。ただ、井戸端会議では、その情報の拡散はSNSよりも小さく、スピードも遅かったです。その点、現代は、デジタル機器を用い、ネットにより、多くの情報があつた

う間に広がります。それは良いことでもあるのですが、状況によっては悪いことにもなります。そういった情報の中に担任に関するものもあります。多くの親にとつて、自分の子どもの学級担任が誰になるのか、どのような人なのかはとても気になることだからです。新しい担任の発表になる前の3月中から、保護者の間では担任たちの情報が共有されます。A先生は良かった、B先生は良くなかったなどです。

4月になり、新しい担任が発表になった後、保護者が新しい担任に対して「今年の担任はハズレ」という発言は避けたいです。特に子ども前でそういった発言をすることは絶対に避けるべきでしょう。担任と子どもとの関係は相性のようなものもあります。これは一人一人の子どもに対してもありますし、集団としての子ども達に対してもあります。前年度に学級経営がうまくいかなかった先生（SNSなどで「ハズレ」と言われる先生）だったとしても、今年度は自分の子どもとの相性が良いかもしれません。私の経験では、前年度の学級経営がうまくいかなかった先生でも、次年度にとつてもうまく学級経営をしていくというケースはよくありました。また、それなりに経験年数があるような先生や前年度にうまく学級経営ができていた先生であったとして

も、次の年にはうまくいかない年もあります。私自身の経験でも、色々な配慮をしながらか学級経営に取り組んだとしても、数年に1度は何となくうまくいかない1年間となってしまうような感じでした。私のようにそれなりに経験年数を経て、学級経営などの研究をしている立場であっても、うまくいかないときもあります。私は学級のあり様はとて「生もの」だと感じています。1人の先生という個性のある大人と数十人のそれぞれ個性を持った子どもが関わり合いながら1つの集団を作り上げていくのです。

新年度のスタートの時点で、保護者が新しい担任のことを「ハズレ」と評価してしまふと、子どももその評価を受け入れてしまいます。次の日に学校に行った際、周りの子どもに対して「今年の〇〇先生はハズレだって、うちの親が言っていた」と伝えることもあります。そういった情報が共有されていくと、担任が何かを伝えようとしても思ったようには伝わらなくなってしまう。4月に新しい学級がスタートした時、担任も子どもも色々なものをリセットし、新年度は頑張っていこうという気持ちになります。前年度にうまく学級経営ができなかったと感じている先生は色々な反省

を踏まえ、「今年こそは……」と新しい年度ではうまくやっていこうと色々工夫を  
しています。親の不用意な一言によって、先生が伝えようとしていることが伝わら  
なくなってしまう可能性が高くなります。

これは子どもも同様です。前年度に色々うまくいかなかったことがある子どもも  
新しい学年になり、集団（先生、子ども）が変わった中で、がんばっていこうと思っ  
ている子どもが多いです。前年度に学級崩壊をしていたというような学年であっても、  
新年度になり、新しい集団になると、はじめの時点では子どもは先生の話を聞こうと  
する態度を示すことが多いです。子どもにとってみたら、「改めてがんばろう」とい  
う気持ちや「新しい先生はとんでもなく怖いのでは」のような様々な思いがあります。  
理由はどうであれ、子どもが話を聞いているうちに、学級経営が上手な先生は子ども  
との信頼関係を築き、良い集団を作るスタートをしていきます。先生の間では、その  
期間を「黄金の3日間」などと呼び、1年間の学級経営に影響を与える時期として、  
非常に重視しています。親の不用意な「ハズレ」発言は、大事な日々を台無しにし  
てしまう可能性があるものなのです。

## ■著者プロフィール

### 鈴木 邦明（すずき くにあき）

帝京平成大学 人文社会学部 児童学科 准教授

1971年、神奈川県平塚市生まれ。

1995年、東京学芸大学教育学部卒業。2017年、放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了。神奈川県横浜市と埼玉県深谷市の公立小学校に22年間勤務。2017年、小田原短期大学保育学科特任講師。2018年から帝京平成大学で教員養成・保育者養成に携わっている。総合情報サイト「All About」や教育情報サイト「リシード」「リセマム」などで、保護者向けにも積極的に情報を発信している。

著書に『オンライン、ソーシャルディスタンスでできる 学級あそび&授業アイスブレイク』『子どもの心と体のストレスを緩和する リラックス学級レク75』『万能の学級あそび 鬼ごっこ大全』（いずれも明治図書）『言い方・伝え方でこんなに変わる 保護者の相談・クレーム対応100』（学事出版）がある。

<https://kuniakisuzuki.jimdofree.com>

